

第90回公開シンポジウム

## 子どもに命の営みを感じさせるために

◆プレゼンター

小泉 昭 男

小泉造園代表 元保育士 庭師／保育経験を生かし全国で園庭づくり

◆パネリスト

一色 伸 夫

甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第90回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「子どもに命の営みを感じさせるために」というテーマです。身近な自然は子どもが生きていくため、遊ぶためにとっても大切なことです。それは、身近な自然には命がたくさんあるからです。五感をつかい、生きものを感じ、季節を感じることで、子どもは豊かに育っていきます。子どもにとっての自然の持つ意味、大人たちの役割について考えていきます。今日の基調講演していただく方は小泉昭男先生です。小泉先生は、小泉造園、庭や公園を造られています。小泉造園の代表、そして元保育士として長年経験を積まれてきた方です。その経験を生かして全国で園庭づくりのアドバイス、施工などを手がけています。自然再生事業と環境教育にも携わっていらっしゃる、京都女子大学非常勤講師もされています。著書として「園庭大改造」「園の身近な生き物たちに出会う探検マップ」などございます。

それから、本日パネリストとして子ども学を最初に設立していただいた東京大学名誉教授の小林登先生に来ていただく予定にしておりましたが、体調不良のため、私がパネリストも兼任させていただきます。では、小泉先生お願いいたします。

小泉：皆さん、こんにちは。小泉です。よろしく申し上げます。今、ご紹介がありましたように、私は京都で造園業をしているのですが、13年ほど京都で保育士をしていました。今は造園業をしております。それで、全国でいろいろな園庭を造ったりアドバイスをしている中で、子どもにとって園庭、樹木、生きものについての話をしています。今から、スライドの施工事例などの写真をお見せするのですが。昆虫の写真も何枚かあります。昆虫が苦手だという人はいますか。あまりいませんね。昆虫が好きという人はいますか。いませんね。話を聞いた後に少し昆虫が身近な生きものに少し興味を持ってもらえるかと思います。

まず、この写真を見てもらいます。この写真の幸せな気分がわかりますか。幸せになりませんか。四

葉のクローバーがあります。ここにもありますし、ここにもあります。たくさんあります。四葉のクローバーは、皆さんはよく野原に出ると、クローバーの中で四葉を探そうとします。実は、四葉のクローバーは固まっています。だから、一つ見つけると結構見つけることができます。この頃、四葉のクローバーだけ出るとい種が売っています。そういうのも商売となっています。四葉のクローバーで少し幸せになれたかなと思います。

ここに「センセークサカッタラバッタイナクナル」と書いてあります。これは滋賀県の保育園で運動会をするにあたり、先生が草を刈っていたのです。すると4歳の男の子がやって「センセークサカッタラバッタイナクナル」と言ったのです。これはなぜそのように言ったのか。それはこの男の子は園庭に出て、草の中のバッタを捕まえて遊んでいるのですが、バッタというのは、草の中にいるということ遊びの中で発見をするのです。先生が刈ってしまったら、僕のバッタがいなくなるということです。僕のバッタがいなくなったら遊べないじゃないかと訴えているのです。でも先生は運動会をしなければいけないので、草を刈るのです。子どもはただ単にバッタを捕まえたりしているのではないということです。その周りの環境もきちんと見ながら遊びをしているということです。その部分が子どもにとってとても大事なことです。私は造園業なので、京都や大阪、兵庫県で保育園などの園庭管理をしています。子どもにとっての樹木はなにかと考えました。こちらの大学にもたくさんの樹木があります。こちらの大学の樹木は一体何なのか。これは緑化です。でも、子どもにとって園庭にある樹木は緑化でしょうか。私は緑化ではないと思います。園庭のものはすべて遊びの要素で、樹木、それに関わるすべての生きもの、小動物を含めてすべて遊びの要素である。大人はそれらを遊びに取り入れられていない。ご存じのように、保育園、幼稚園の子ども遊びは、大人の単なる遊びではありません。生活そのものが遊びです。だからそこに関わる自然の生きものすべてが遊び、生活の要素ということです。しかし保育士はその遊びを取り入れていない。養成学校では教えてくれない。大学で勉強していることは、主にピアノ、栄養学とか心理学などです。ですから、このように生きものの関わりを大学では教えてくれない。このようなことは現場でするのですが、現場に出ると、子どもはすぐにこのようなところから関わりを持ったりします。自然と遊ぶのは、一つは命に触れて遊ぶということです。これが一番大事であると思います。それは身近な自然と遊ぶことから感じられる部分です。身近な自然と触れ合うのが一番近道です。里山保育という保育をご存知でしょうか。随分前からあるのですが、豊かな自然に子どもを定期的に連れて行き保育をしているところがあります。里山に行くとき身近な自然がたくさんあります。他に、森のようちえんというのをご存知でしょうか。去年、兵庫県の美方郡で全国大会がありました。今年は神奈川県で第9回目が開催されます。この「ようちえん」というのを平仮名で書いてあるのは、私・公立の幼稚園と区別するために、平仮名で表記されています。殆ど無認可のところが多いです。発祥はデンマークです。ムツレの環境教育をご存知でしょうか。これもスウェーデンが発祥で、このような環境教育をやっているところがあります。ムツレは妖精です。しかし、すべての保育園がそのようなことができるかどうかという部分です。確かに森が近くにあればできます。でも、幼稚園、保育園の近くに森や里山があったりするものではありません。都会の真ん中にも保育園・幼稚園はあります。そのようなところに行けるかどうかという問題もあります。

一番多く関わるができるのは園庭の部分です。これは兵庫県なので、皆さんご存知かと思いますが、兵庫県は2013年に保育所の最低基準の条例に、「自然や生命の大切さ等の理解を深めるための環境学習、教育を取り組むよう努める」ことが規定されました、今年の4月の子ども環境学会で聞いたものです。ただ、これを実践するのは、これから皆さんが現場に出た中でできることだと思います。

豊かな自然に関わることも、自然に豊かに関わるができる身近な環境を整備することが大事だとあります。「豊かな自然に関わる」とあります。これは里山とか森のことです。よりも「自然と豊かに関わるができる身近な環境が大事」とあります。小さな自然でいいのです。小さな自然でいいのですが、この自然と豊かに関わるのことができる身近な環境とは、園庭であつたりそのような環境の整備です。それともう一つは環境としての人の整備が大事です。やはり子どもが生きもの、自然と関わる時には、必ず保育士の関わりがないと駄目です。子どもを自然の中に連れていけばそれでいいのかというと、そうではありません。必ずそこに、保育士なり幼稚園教諭、大人の関わりがないとそれは駄目です。子どもには直接いろいろなことが伝わりません。これは皆さんご存知の「となりのトトロ」のメイちゃんです。メイちゃんが初めてトトロに会った時のシーンです。この目玉をどんぐり眼といいます。これは宮崎駿さんが著書の中で書いているのです。メイちゃん目を表現したかった。子どもの目をどんぐり眼、きらきら輝かせる仕掛けということでこどもの遊び研究会というところがこのような文章を出しています。瞳孔が興奮状態にあるときに開きます。好奇心に誘発され何だろうと思って手を伸ばしている時の子どもの表情は真剣そのものです。まさしく「トトロ」に出会ったメイちゃん目です。真剣そのもので「これは何だ」という目です。

これは単に目を見開いているだけではなく、そのものを一瞬で捉えることができる能力とも言われています。だからただ単にそのものを見開いて見ているだけではなく、そのものを記憶をしたり、より細かく見ようとすうそういう見開きです。それが脳と一緒に動いているということが言われています。



私の保育園の園庭作りの写真をお見せします。これは、施工前の写真です。これが少し施工した時の写真です。これが今の写真です。今は完全に森状態です。これがこのような状態になっています。だから、子どもは毎日この小さい空間で生きものと触れて遊んだりしています。これは2007年に築山のところで、これは亀岡の保育園ですべり台です。築山のところにすべり台があつて、ここの保育園の先生はこのすべり台がとても照り返しがきつくて、夏の間は滑れないということでしたので、何とかしようということになったのですが、予算がないということで、ここでは苗木を植えました。この支柱よりも細い苗木を2007年の1月に植えました。これが、2011年の8月です。わかりますか。動いていないのはすべり台だけです。これは先駆性の樹種のネムの木などを植えています。これはクヌギで結構成長が

早いです。ネムに子どもが二人登っています。横から見るとこのような感じだったのが、こんな感じになり、滑り台はもうはっきりとは見えません。もう、森状態です。3年ぐらいでこのような森ができます。今回の講義は大学生なので、経営者がいませんが、保育園とか幼稚園で木を植える場合には、できれば苗木を植えてくださいといっています。本当は大きな木を植えたほうがお金儲けにはなります。ですが苗木なら千円もしませんので、10本植えても1万円もしません。苗木を植えると森ができやすい。高木を植えるとすぐに緑になりますが、なかなか子どもには接しない。だから保育園などには入園の時に苗木を植えてくださいと言います。すると6年間で木は大きくなりますので、その成長が見られるということがあるのです。親御さんは入園記念に苗木を植えて、卒園するまでその木を大切にす、保育士は子どもの成長を見守ると言う提案をしています。なかなか難しい部分があります。

「センス・オブ・ワンダー」、これは皆さんご存知だと思うのですが、レイチェル・カーソンの本ですが、ここに「神秘さや不思議さに目をみはる感性」の部分ですが、ここに大事なことが書いてあります。知ることは感じることの半分も重要でないと書いています。今の学校教育は、知ることが中心で、知識を詰め込みます。小学校にいくと知ることばかりです。感じることは、まずないです。でも、幼児期の間には、せめて9歳まではとされているのですが、9歳までは、まず感じることを中心にした方がいいのではないかと考えています。ただ、感じるだけではなくて、感情も知性も共働しているといわれています。そして、知識や知恵を生み出すということです。ここにも同じようなことが書いてあるのですが、くらしている世界の喜び、感動、神秘などを子どもたちと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が少なくとも一人は必要。先ほど言った、関わる部分ですが、やはり大人が入らないと駄目だということです。神秘さを不思議さに目をみはる感性というのは、大人が関わらないと育たないとレイチェル・カーソンも言っています。

園庭は季節を感じる窓とありますが、ここには6つに分けています。

①植栽は子どもたちの触れ合うところにとあります。木は園庭のどこにあるか。皆さんはこの前まで実習に行っていたと聞きました。実習先の保育園、幼稚園を想像してもらおうといいかと思うのですが、園庭の中に樹木はあったと思うのですが、どこにありましたか。子どもたちの身近なところにあったのか。それとも真ん中をグラウンドとして使うために周りにあったのかということです。植物によって遊びの枠は大きく広がります。季節の移行を知らせてくれるのです。落葉樹もそうですし、今この教室の窓から見えている木があります。その木は何かわかりますか。その木も落葉します。常緑であっても必ず落葉しますので、そういう季節の移行を知らせることがあります。

これは、木登りをしています。ここに5人木登りをしています。女の子が順番を待っています。こちらにうんていがあるのですが、うんていは誰もしていません。なぜ木の方が面白いのか。絶対にうんていよりも木の方が面白いのです。なぜか。手と足をばらばらに動かして上



まで登る。見晴らしがいい、これはグミの木ですから花も咲きますし、実もつきます。花が咲けば虫が来ます。実も取って食べられます。いろいろな発見ができます。そういう部分です。その辺りの面白さがうんていとは違う部分です。だから、そこには子どもの興味関心があるということです。これも桑の木です。この桑の木には黒い点が見えるのですが、これは桑の実を取っています。これは滋賀県の保育園ですが、これは異年齢保育という2歳からの縦割り保育をしています。だから、年長の子どもが毎年必ずこの木に登って桑の実をとります。2歳から3歳の子どもにあげています。これはネムの木です。ちょうどこの位のところに子どもが登っています。このネムの木を見たらわかるかと思うのですが、下枝はないのです。枝はないけれども子どもはどうやって登るかという三輪車を持ってきて、三輪車を立ててそこから登るのです。上まで登るのですが、ここは先ほど言ったように異年齢保育をしていますので、必ず年長の子どもが登る、それを2歳、3歳、4歳の子どもが見ていて、そういうのを見ながら覚えていくのです。そして自分が年長になったら登る。これは確かにかなり危ないです。危険はありますが、ここの園長先生は、それを許しています。いろいろな園の考え方がるので、このような木には絶対登らせないという保育園もあります。でも、子どもに何の力をつけるかということを考えておくとこれを許すかどうかというのはおのずと見えてくると思います。

これは宮崎駿さんと養老猛司さんの「虫眼とアニ眼」という昔、小学館から出版された本です。読んだ方もいらっしゃるかと思いますが、ここにも危なくないと子どもは育たないと書いてあります。養老猛司さんも保育園の理事長もされています。ここに木に登ったよ、僕泣かなかったよと書いてあったり、今はあまりしませんが、ナイフを使ったりします。ここに火を燃やせる、火を消せると書いてあります。このごろはライターに安全装置が付いていて、子どもには使わせないとになっています。これは、逆だと思えます。火を点けることはできても消すことを覚えておかないと駄目です。点けるのは点けれる、けれども、消すことを子どもは覚えておかないと安全装置をつけても子どもは力さえあればつけることはできますので、ついた時にどう対応するかということをもまず学習することが必要だと思えます。

これはレンギョウのトンネルといえます。皆さんはレンギョウの木を知っていますか。レンギョウという木は春になると見たことがある人はいると思いますが、冬の間はこのように落葉して、明るいトンネルです。春になると黄色い花が咲きます。この花を見たことがあると思うのですが、このように、季節を感じたり、ここのトンネルは生きています。だから、実はここは、箕面の保育園ですが、この

ところにカマキリが卵を産んだのです。それを保育実践の中で絵本と照らし合わせて発表していたという例もあったのです。このような相手が生きものだから生きものが関わるといふ部分、そこに子どもが興味関心を示すといふ部分です。当然ながら、卵は孵って命が生まれたのですが、そのような営みが見えるということが大事であると思えます。これもレ



レンギョウのトンネルで、これは今年の春に作ったレンギョウですが、小さなトンネルです。これは私が施工をしていたら、子どもがやってきて「森ができています」と言ったのです。びっくりしました。子どもにとっては森になるのです。大人にとっては大人の背丈ぐらいの高さなのですが、子どもにとっては森になるのです。やったと思ったのですが、子どもにとっては本当に小さな木でも森に見えます。大人になって自分たちが育ったところに行くと、こんなに小さかったのかという感覚があると思うのですが、そういう感覚です。子どもにとっては小さな木が森です。森で遊んだという記憶だけが残ります。そして戻ってきた時に、小さいという感覚なのですが、そういうことが子どもにとっては大事なのです。

これは岩のぼりです。これは観察会で撮った写真ですが、子どもはこのような岩登りが好きです。このようなものを高槻の保育園で造ったのですが、このように崩れ積みの感じで積んであるので、3歳ぐらいの子どもがよじ登ろうとします。これは高さが1.7メートルぐらいあるので、子どもにとってはちょっとした岩登り的な感覚です。もうひとつあります。これは尼崎にある幼稚園なのですが、これは先ほどの石垣と違って、野面積みといっ



で、でこぼこしていません。つるりとした感覚です。だから、これは登れません。これは高さが2メートルあるので、大人でも登れません。でも、ここの幼稚園の園長先生は、施工するに当たって、登れないものを作ってくれと言われました。普通に考えるとおかしいです。幼稚園で遊ぶものが、遊べないものを作ってくれと言っているのです。普通はこのようにすれば、このように遊べるから作ってくれと言われるのはわかるのですが、ここの園長先生は登れないものを作ってくれとおっしゃった。なぜ、そう言ったのか。それは年長の3月の最後の方に、もし、そのクラスの一人でも登れたらいい。もし、登れなかったらそれでもいいとおっしゃった。なぜかという、皆さん幼稚園、保育園で遊んで楽しかった思い出があるかと思うのですが、自分が挑戦をしてできなかった思い出はあまりないと思います。でもここでは、自分が挑戦したけれども、3年間がんばったけれどもできなかったという思いを持って卒園することがいいのだとおっしゃったのです。このような考え方はなかなかありません。だから、この幼稚園は、尼崎の駅の近くにある民間の幼稚園ですが、入園するに当たって、園長先生は、うちの幼稚園に来たら腕の一本ぐらいが折れる覚悟で来てくださいとおっしゃるそうです。自転車と徒歩でないと登園できません。しかしここの幼稚園は満杯です。そのような保育指針をたてている幼稚園もあります。子どもにとって危険な部分を背負わせながら、やっているというのもあります。

リスクとハザードですが、遊びの楽しみの要素で冒険や挑戦の対象となる子どもの発達にとって必要な危険性は、あらゆる遊びのひとつの価値である。小さなリスクから学ぶことで経験的に危険を予測して回避することはできると書いてありますが、小さなリスクは子どもに負わせた方がいいということです。大きなリスクは駄目ですが、子どもにとってそのように危険を回避することのできることを学ばすことは

とても大事です。安全を前に出していくと子どもはいつも安全だと思って遊んでいますから自分で危険を予測することができない。やはり、ちょっとしたリスクを子どもに負わせるということが大事です。ハザードの部分ですが、これは遊びの価値とは関係ないところで事故が発生する子どもが予測できない、対処できないこと。子どもが危険を予測しないでやることはリスクの挑戦とは言えない。と書いています。

これは、国土交通省は都市公園における遊具の安全確保に関する指針に書いている文章です。きちんと国が考えて書いているものです。国もこのような考えをきちんと持っています。保護者の目はいろいろとありますが、でもきちんと子どもに何を育てるかということを負わさないといけないという部分です。これは、先ほどの本の挿絵ですが、ここに大人が口を出さなければ子どもたちはすぐに元気になる。先生たちの考え方が鍵だし、親の考え方を变えるのも大切。その裏づけとなる空間があるのでと書いてあります。やはり親の考え方も変えていかないと駄目です。先生の考え方も変えていかないと子どもは育たないと思うのです。そのためにはいろいろな空間を作っていく必要があると私は思います。

## ②子どもは園庭のどこを住処(遊び場)としているか

子どもはエリア、遊びの部分ですが、空間の隅っこが好きということで、心理的、社会的に安息を求めるといって、定義のはっきりしていないものがイメージを豊かにするという部分です。具体的には、このような砂場。砂場というのは子どもにとってはいろいろ「みたて」遊びなどができるので、とても大事ですが、やはり落ち着いた空間で遊びたいのです。これは乳児用の砂場ですが、エッジを灌木に近い短い小さな木で囲う。下の写真はオーストラリアですが、これも灌木で覆っていて、こちらは、ちよ

う子どもが走り回れるような空間になっていたのですが、きちんと子どもがしゃがんで遊ぶと視線をおさえられるという空間になっています。ここのエッジの部分はグミの木で造っていて、ここに草が茂っているのですが、この中にたくさん遊具が入っているのです、子どもたちは隅っこで遊ぶということです。これはいろいろなエッジで遊んでいるのですが、これもわらがぼろぼろですが、三匹の子豚をイメージして、先生が11月頃に農家の方



から稲をもらってきて束にしておいていたのですが、ここに訪れたのは3月だったので、もうぼろぼろになっていたのですが、このわらをこの竹の中に積んでいき、わらの家を作るという遊びです。これも子どもたちが木切れを作って、金槌で打って、3人ぐらいでまごとしていたと思います。このように周りを囲われると結構落ち着いた空間ができるのです。これもレンギョウなのですが、ここに入らないぐらいたくさん入れて、子どもが遊んでいます。そういうエッジの部分は子どもにとって大事な部分です。この部分などは、樹木ですから、春になると花が咲いて緑に茂ります。これもオーストラリアの写真ですが、このように丸太が転がっていたり、木切れなのですが、これで自分で積木のようにしてエッジを作る、六角形や四角形に組んでいくのです。これはピンコロという9センチ角の角材です。このようなも

のを保育園に置いていたら、子どもが投げたらどうするのという話ですが、これはドイツの幼稚園ですが、自分でこのように積んで、この中で遊んでいました。これも木の根っこを置いておいて、これは多分、馬で遊んでいるのか、竜で遊んでいるのかわかりませんが、イメージを共通にしながら遊びを展開していくというのが、子どもにとっては面白いのです。これも丸太です。丸太がただ単に横になっているだけなのですが、子どもがいろいろなごっこ遊びをしたり、ドンチャンしたり、たまには座って本を読んだりする空間になる。いろいろなイメージを展開することができる素材というのがとても大事な部分になります。これもドイツの小学校の写真ですが、小学校が改築した時に、木の根が出たので、処分せずにこのように積んで組み上げているだけなのです。

### ③五感を感じ とぎすます空間

五感とは子どもの時にとぎすまされるということで、クスノキ、キンモクセイ、クチナシ、ジンチョウゲといういろいろあるのですが、キンモクセイの花はいつ咲くか知っていますか。今です。保育園にも1本ぐらいキンモクセイはあるのですが、キンモクセイの花が10月の上旬に咲くのですが、咲くと今は運動会のシーズンです。この花が咲くと運動会が始まると子どもたちに伝えておくと、この子どもがいずれ小学校にいったり、大人になったりすると、先生が運動会の時に咲く花だと言っていたことを思い出してくれるかもしれません。またクチナシの花はどこでも町の中に咲いていますから、その匂いを嗅いだ時に、ふと保育園、幼稚園の時に、先生がこの花が咲いたら梅雨が始まると言っていた思い出してもらえます。またジンチョウゲの花はいつ咲くかご存知ですか。ジンチョウゲの花は3月に咲きます。ジンチョウゲの花が咲いたら、年長さんなら小学校に上がる。そういう意味づけをしておくのです。すると、ジンチョウゲの花は街中どこでも咲いていますから、いずれその匂いを嗅いだ時に、ふと保育園のことを思います。小さな小さな木です。ですが、そのように意味づけをしておく、子どもにとっては忘れられない木になるということです。あと、クサギとかオガタマといろいろあります。オガタマの花は梅雨の前に咲き、バナナの匂いがします。もし、機会があればオガタマの匂いを嗅いでください。クサギも、これは名前からきていて臭い匂いがするのですが、実はこの木は今年の春に京都女子大の学生に匂わせると、アーモンドの匂いがすると言っていました。そのように木はいろいろな匂いを持っています。だからそういう意味でいろいろな感覚を繋げていくことも大事だと思います。

視覚では植物の緑は同じものではない。萌黄色といいますが、ここでも、こちらの方に山があつてアベマキ、クスギ、コナラが芽吹きの際は萌黄色になると思うのですが、多分、皆さんは見ていると思います。また、そこのクスノキの新緑などはとてもきれいだと思いますし、常緑とか落葉など、今年は夏がずっと続いているので、少し心配ではあります。他、季節で変わるモミジ、ケヤキ、イチョウなどもあります。視覚の部分でいうと、子どもの目線は当然大人より低い。だからいろいろなものを発見するのが、子どもの方が早いです。生きものを発見するのも、子どもの方が早かったりします。あと、鳥のさえずり、秋の虫、カエルの声という聴覚の部分。そして小動物を触る感触、これは後ほど写真でお見せします。味覚の部分ですが、保育園の果物、果樹というのは、果物屋さんの果物とは違います。これも新緑です。八瀬のケーブルの近くですが、これは新緑であつたり、真冬では全く景色が変わるということで、日本ならではの。

触覚の感覚はどうでしょうか、山のゴキブリ。昆虫を手で持つ感覚それはとても奇妙です。家のゴキブリは手で持てない。それはよく解ります。山のゴキブリは手で持てます。足の感触は何ともいえません。余談ですが、山にもゴキブリはいます。元々ゴキブリは山にいたのです。ゴキブリはなんと3億年も同じ形をしています。ということは、皆さんの遺伝子の中に少しぐらい、ゴキブリの遺伝子が入っている可能性があります。これは歴史の中で証明されていることです。だから、ゴキブリを殺すに当たっては、自分のご先祖様を殺すと思って叩き殺してください。山のゴキブリは手で持つことはできます。かわいいです。このような顔をしています。これをかわいいと思えるようになるとプロです。

聴覚では春のさえずりということで、ホオジロを知っていますか。顔の頬が白いのでホオジロです。聞きなしというのを聞いたことがありますか。聞きなしというのは、鳥の言葉を人間の言葉に置き換えるという日本人ならではのものです。ホオジロの聞きなしは「一筆啓上仕り候」と鳴きます。本当かと思いますが、本当によく聞くとそのように聞こえます。ここに、ツバメがありますが、ツバメの聞きなしを知っていますか。ツバメは何と鳴きますか。これは、何を口にくわえていますか。土を持っています。ツバメは何を食べるか。虫です。ツバメは「ムシクツテツチクツテシブーイ」と言ってなきます。今度、来年の春、ツバメが止まっていたら、よく聞いてみてください。「虫食って土食って渋い」と鳴いています。そのような耳を持って欲しいということです。これは、今頃草むらのなかで鳴いているコオロギです。コオロギの中でも聞きなしがあります。ツツレサセコオロギを知っていますか。これを聞いてみてください。(コオロギの鳴き声) これ、何と聞こえますか。これは、皆さんの耳での捉え方と昔の人の捉え方とは違います。何と聞こえましたか。正解はありませんから、何と聞こえたでしょうか。これはツツレサセコオロギという名前からきているのですが、「かたさせつつさせつづれさせ」と聞こえます。皆さん、もっと感性を鋭く持たないと、昔の人に負けていますよ。させというのは針仕事のことです。ですからつづれの針仕事、かたさせ、かたの針仕事、裾の針仕事。要するに、この虫が鳴いたら冬支度を始めなさいということです。今でも鳴いています。多分、夕方頃、どこかで鳴いています。この感性、このように聞こえるか。ただ単に「リーリーリー」と聞こえるか。どれだけ自分の感性を磨くかという部分です。昔の人はそのように聞いていたのです。生きものの鳴き方から冬支度をしていたのです。この聞き方も、子ども一人ひとりに聞くと、必ず違う答えが返ってきます。それがいいのです。全員同じように聞こえるということが間違っている。秋の虫の歌があります。あれをカタカナで書いてあります。だからカタカナで聞きます。でも、子どもに先にこの歌を歌わせたら、その虫の声がカタカナでしか聞こえない。でも本当はそれぞれ違う感性を持っているから、違う声で聞いていいのです。それを無理矢理あの歌にまとめているということはどうかと思います。だから子どもには一人ずつ違う感性を持って欲しいし、違う聞き方をして欲しいし、それがすべて間違いでもないという部分です。だから今、皆さんが全員違う聞き方をしてもいいのです。間違えではないのです。

味覚の部分ではやはり果物屋さんの果樹と園庭で採れたものは違うということです。渋かったり、甘みがそれほどなかったりします。また舌で感じる賞味期限があります。商品の賞味期限の日にちをみて食べるのを止めるのではなく、やはり舌で感じて欲しいものです。

#### ④園庭緑化ではなく 遊びの要素

樹木は緑化ではない。これは、ごっこ遊びですが、カラスノエンドウの笛を吹ける人、これは、ピーピーとなる笛ですが、5月上旬2週間ぐらいしか遊べません。ストローの笛などはピーと鳴りますが、これは真冬であろうと、雨が降ろうと遊べますが、カラスノエンドウは5月の2週間だけです。後は黒くなってしまいます。だからこのような草花遊びは期限付きです。その時期に遊んでいないと来年まで待たなければなりません。それだけ来年まで気持ちを持っておかなければならないというのが、草花遊び。対自然遊び、対相手が生きているからです。これは、私の写真にも載っているクローバーで子どもが遊んでいる写真です。少し知識がある真面目な



先生は、このようなことをしていると「何をしているの、草だって生きているのよ、ちぎってはいけません」と言います。この写真を撮ったのはこの保育園の先生ですが、実はこの後、このようになります。ここです。ここに居ます。手しか見えませんが、この写真がこのようになるのです。子どもというのは、このようにことができるのです。だからこの保育園の先生は、どうなるかと見ているのです。ここで、声をかけない。子どもがどうするか。子どもがこのようにして遊ぶというのは、この子どもの時しか体験できないけれども、この子どもは埋めてしまったというイメージでしょう。でもそういうことがこの子どもにとっては一生の思い出になることがあるのです。ここで「やめなさい」と言ってしまったら、もうこれはできない。ここまで遊びが展開できない。だから、遊びを見守る。指導するというのは、このようなことも一つの指導なのです。放っておくのではなくて、どうなるかというのを見ておくというのも一つの指導です。「やめなさい」というのも指導です。どちらを取るかという部分です。

草花あそびとしていろいろあるのですが、これはムクロジの実です。この実は皆さんは遊んだことがあると思います。これは、この中に黒い種が入っているのです。ムクロジの種を見たことがありますか。

皆さんあると思います。羽子板の羽のおもりはムクロ樹の実です。実の周りにぶどうのように包まれているのですが、それを水で洗うと泡がでます。これはエゴの実ですが、エゴの実も潰して水で洗うと泡がでます。エゴの実はどこにでもありますが、ムクロジの実はなかなかないのですが、これが京都でないので残念なのですが、京都の府立植物園にムクロジの木が2本あります。これは、基本的に植物園の実には獲ってはいけな



なっているのです。植物園に友だちがいて、獲ってはいけないと言われていたのです。このムクロジは、植物園の芝生広場のトイレの横にあります。トイレの横に水道があります。ということは、実は秋になると落ちるのですが、拾ってそれを水道のところに持って行き、あわ立てれば、きれいになります。というのも誰も知りません。多分植物園の人はそういうことを知って植えているのですが、もし機会があって、秋に京都府立植物園に行くことがあったら、芝生広場の横のトイレの横に行けばムクロジの実はいくらも落ちています。実生でも簡単に育ちますので、幼稚園、保育所で育てても面白いと思います。あと、このような木の実、これからクヌギ、アベマキなど、全部実が付きます。ヌスビトハギなどもあります。本来のヌスビトハギはこのような形をしています。これは、何でしょう。これは、どんぐりです。これは、チョコレートです。よく似ています。子どもの前ではできませんが、このどんぐりは磨くと光ります。この里山にあるかどうかはわかりませんが、シリブカガシという樫の木です。ここのところが少し深くなっているのですが、シリブカガシといわれています。子どもに山に行って拾って、洋服で磨くとピカピカになります。普通のどんぐりではあまり光らないのですが、これは結構光沢を持っているので、きれいに光ります。このようにして遊んだりするのです。園庭は遊びの要素ということで、落ちていた葉で遊んだりします。



#### ⑤収穫 野菜 果樹

果物屋さんの果実とは違うので、自分で獲ることと年長さんがとってあげるということ。他、果物に生きものが関わるという部分です。ここにびわの木があります。びわの花はいつ咲くか知っていますか。実は食べたことがあるけれども花は見たことがないという人もいるでしょう。びわの花は、12月か1月に咲きます。もうつぼみを持っています。どこかのびわの木を見てください。上の方に小さなつぼみを持っています。では、この12月か1月にかけて花が咲くのですが、これは誰が花粉を運ぶと思いますか。虫はいません。誰でしょうか。鳥です。鳥が運びます。よく保育園とか幼稚園などでびわの木があったら、この実がついたら袋をかけます。なぜ袋をかけるのでしょうか。鳥に食べられないためです。鳥が花粉を運んで実をつけたのに、なぜ鳥が食べられないのでしょうか。これは人間の我です。鳥が花粉を運んでくれて鳥が実を結んだのに、なぜそれを横取りして、美味しいと食べているのでしょうか。それはいいことでしょうか。これは子どもにとってどうなのでしょう。やはり昔の人は柿の実を2つ残せと言いました。一つは行き倒れの旅人に、一つは冬越しの鳥のために。今では行き倒れはありませんが、自分だけ食べればいいのかというのはどうなのでしょう。身近な生きものがいてこそ、実が結ぶのです。もし、来年から鳥が花粉を運ぶことを拒否すると言ったらどうしますか。もうびわは食べることはできません。だからせめて、周りにいる生きもののことを気にして欲しいと思います。

これはお誕生日ゼリーといいまして、京都の保育園で、12ヶ月間毎月、ここで獲れる果汁を使ってお

誕生日の日にゼリーを3歳から誕生日に給食室に作ってもらいます。もちろん果樹は保育園で採れたものです。だから、この子どもはずっと同じ果樹のゼリーを食べています。私が卒園させた子どもが以前に同窓会をした時に、早苗ちゃんが「私はお誕生日のゼリーがずっとびわだったけど、なぜ」と言いました。この子どもは6月生まれだったのです。そういうと「他のゼリーを食べたかった」と言っていました。皆さんは保育園、幼稚園で給食の思い出がありますか。この子にはあったのです。やはりこのように思い出に残るものというのはとても大事です。この早苗ちゃんにしろ、この子どもにしても、栗であったりびわであったりとうことは一生忘れない。

収穫ですが、私は幼稚園、保育園の畑の収穫が目的ではないと思います。収穫より大事なことは、「いただきます」という言葉です。これは命をいただきますということです。どこかの学校で親御さんが私は給食費を払っているのに、先生から給食もいただいているわけではないと言って、「いただきます」と言わないという保護者がいました。その方は意味がわかっていません。命をいただきますということ、いただきますと言うのであって、先生からいただきますということではないのです。目的は収穫ではありません。収穫を目的にしているのは農家です。季節を感じる露地ものですから、皆で育てる。そこから季節を感じる。畑仕事をしているとこのような虫が出てきます。また草抜きをするとこのような虫が出てきます。子どもはカブトムシの幼虫が出てきたといえます。カブトムシの幼虫は腐葉土の中にいるので、土の中にはいません。でも子どもにとってはこれはすべてカブトムシの幼虫です。そして背中向きで行くのです。背中向きで行く子どもとうつむいて行く子どもと2種類います。幼稚園実習に来年いくと、このように2種類居ますので、観察してもらった方がいいです。

これはオーストラリアの畑です。このような畑もあります。こちらは、こちらは何のための畑かという、このような野菜にとって害虫という生きものの棲家です。ニジュウヤホシてんとう虫やアオムシであったりしますが、これは畑からしたら、畑を食い荒らす生きものだから、それをこちら側のエリアに持って行ってここで育ててもらおうということです。子どもにとって害虫という虫はいません。なめく



じですが、これも葉を食べますが、子どもにとっては畑の生きものは全部生きものです。害虫ではありません。だから害虫駆除ということで薬を撒いたりすることがあると思いますが何度も言いますが子どもにとって害虫はいません。ムカデも気持ちが悪いです。よく見るとここで卵を抱いているのですが、これも害虫ではありません。だから、保育士、幼稚園の先生はこのようなものを害虫として判断してはいけないうっているのですが、なかなか難しいです。田んぼをするとよく蚊がわくといえます。蚊もどれだけ刺されるかということを幼児期にとっては大事なことです。この前雑誌の中に小児科の先生が子どもにとって蚊にたくさん刺された方が大人になるにつれて免疫ができると書いていました。刺されると子どもが掻くので、掻くと、とびひになるといわれますが、基本的にはとびひになる前に薬を塗るとい

うことが一番大事です。そういうことをきちんと対処しておけば、免疫ができます。大人でも都会に住んでいる人が田舎にいくとヤブカに刺されたりします。それはヤブカというものに刺される免疫がないから刺されると腫れるのです。ですから子どもも一緒です。どれだけ刺されるか、それを保護者にきちんとと言えるかどうか。その部分です。幼稚園や保育園で田んぼをしていると、お茶碗一杯しか獲れなかったとよく聞きます。実はお茶碗一杯ご飯を食べることによって、赤とんぼ1匹、ミジンコ10万匹、蛙3匹、彼岸花1本、ジシバリ2本、涼しい風30秒守れるとこれは生態学の話ですが、このような言葉があります。ですからたったお茶碗一杯ですが、これだけの生きものという環境を守っているということです。認識するとお茶碗一杯でもとても大事になります。収穫ではないです。周りのものがいろいろと関わっていると感じるのが大事なのです。

#### ⑥生きものとの出会い

命と遊ぶというところですが、虫捕る子だけが生き残るという部分があって、これは小学校の観察会です。このカナヘビを持つ力、この指先、これは、カナヘビは逃げます。でもこの男の子は二匹捕まえたと思えないといけなから、しっかり持つと潰れます。やわらかく、相手が生きているからこそ、指先に神経を研ぎ澄ませて、やさしく持っています。こういう力がとても大事です。保育園や幼稚園に実習に行くと、2歳ぐらいでダンゴムシを潰したりします。潰すと先生は「潰してかわいそうに」と言います。

でもその力がやがてこのような力を生むということです。相手を潰してしまったから、次はやわらかく持つということができるようになります。そういうダンゴムシを潰す力というのは、後々とても大事な力なのです。子どもというのはそういう力を順番につけていきます。この写真は、蝉獲りをしています。年長の子どもは毎日こんな網で蝉が捕まるわけではないのですが、獲っています。蝉を捕まえるとこのようにして持つのだと渡したりしているのです。



実はこの写真がいいのは、この子どもです。この子どもは2歳です。年長の子どもが獲れないのに2歳の子どもが獲れるわけがない。でもこの子どもは毎日お兄ちゃんが蝉を獲っているのを見ているのです。たまたま網が空いたのでしょう。私もと思って蝉をとる網を持って追いかけている。これが保育園のすばらしさです。これは一般に公園で遊んでいる姿でこのような姿は見られません。相手が生きているというのも面白い。これもモンクロシャチホコガの幼虫ですが、こんなこともできます。気持ち悪いと思わないでください。モンクロシャチホコガの幼虫は今桜の木がこの学内にもあるかと思いますが、結構たくさんついていると思います。モンクロシャチホコガの幼虫は刺しませんので、このように子どもが手にこんなのができたと持ってきたのですが、このようなこともできます。かわいいです。子どもにとって自然がなぜ大事なのか。一つは子どもが自然だからです。そして自然のなかで出会う生きものを媒介に繋がるということです。これは4人の子どもが蝉を獲っているシーンです。この4人の子どもが蝉を獲るため

にこのブロックを園庭の端から運んでくるのです。この男の子がリーダーです。一生懸命獲っているのですが、この男の子は獲れないので、リーダーが変わるのですが、リーダーは怖くて立てません。でも、この目とこの目が一匹の虫、蟬を見つめているのです。ここには先生はいません。皆が協力して一匹の蟬を捕まえています。でもこれは失敗するのです。失敗をするからこそ、次にどうしたらいいのかを学ぶことができる。相手が生きているから飛んでいくということです。それがとても大事なことです。

自然は子どもに何をもたらすか。生きるためのすべてを教えてくれる。また、生きものを捕まえてきて、飼育観察ということをよくします、飼育するということはとても大事だと思います。昆虫の一匹や二匹捕まえても、家に持って帰っても、自然が絶滅することはありません。そういうものは捕まえて是非持ち帰って、家の中なり、保育室の中で飼育してほしいと思います。飼育することは、命を預かり、重さを感じるということです。飼育していると必ず死んでしまいます。でも、その時に初めて命の重さというのを感じるができるのです。外に蟬の死骸が転がっていると飼育ケースの中で昨日まで鳴いていた蟬が転がっているというのは違います。だからその辺りの部分を感じて欲しいと思います。自然には子どもの欲しいものが揃っているということで、興味、関心を受け止めている場があるということです。身近な自然に遊ぶというのは、自分の行動に失敗をして遊ぶことができるということです。今の学校は失敗ができない空間になっています。失敗があるから次への思いや期待が膨らむのです。また教訓にもなります。大人にとって無駄なことができるということ。大人は、このようなことをしても何もならないと言います。でも子どもにとってその無駄ができるということはとても大事なことです。観察することはとても大切です。観察の文字をみるとわかるのですが、まず観がきています。じっくりその対象物を観ることからはじまります。そして察です。考えるということです。このことが大事なことです。いまの学校教育は、なぜだろう、なぜかしらというのは今はもう置いてけぼりになっています。やはり子どもにとって、何だろうと考えることが大事で相手が自然だから面白く深く探ることができる部分があります。

鏡は先に割れない。これは環境教育の言葉なのですが、近くにいる大人がその不思議さに共感して、面白さに気づくふりをして子どもの探求心に火をつけるということです。大人は大抵何でも知っています。でも、それを子どもにどう伝えるか。自分の知っていることを自慢するか、子どもから発想できるようなことを引っ張り出していくか。保育士はやはりこの部分だと思います。子どもに言ったことに対して、どれだけ話を広げるか。興味関心を膨らませるかということがとても大事な部分です。保育園幼稚園の先生は教えるのではなく、子どもからの発想を待てるか、これは教えるより難しいことです。

これはアゲハの幼虫です。アゲハの幼虫はみかんの木に来ますが、実はこのようなこともあります。これはキャベツ、アブラナ科です。キャベツの葉を食べています。このようなこともあります。理科のテストでアゲハの食草はアブラナ科と書けば0点です、しかし現実とは違います。自然は奥深いものです。教科書通りには自然はいかないこともあるのです。

見ているものが同じでも見えているものが違うということはどういうことか、見ているものは、先ほどもいいましたが、この大学の樹木は皆さん見ているのですが、中々奥まで見えないという部分です。実はこのスライドの中に蝶がいるのですが、見えますか。ここにいます。見えますか。小さくて見えません。この蝶はアカタテハですが、木の葉が食草ですから、そのことを知っておけば、草を観たときにい

るかも知れないと思いつけることができるのです。このような毛虫を知っていますか。これは人参畑やバセリによくいるのですが、キアゲハの幼虫です。このようなものもいます。これはいかにも刺しそうで、触りたくないですが、刺したりしません。これはルリタテハの幼虫です。だからこのようなものを見てくれるけれども、気持ち悪いとか刺すと見ると、このように飼育観察することはできないので、少しその部分、見えている部分を、少し深く生きものについて知ってもらったらいろいろな保育展開ができるかと思えます。

これは「誰だ、唾を吐いたのは」と書いてありますが、このような唾を春先に草の間に見ます。もちろん唾ではありませんが、私は子どもたちと散歩にいくと、子どもに「誰だ、こんなところに唾を吐いたのは、気持ち悪い」というのです。触ってごらんというのですが、気持ち悪くてさわれません。実はこれは中にはこのようなものがいます。アワフキ虫といいます。だから少しだけ自然に触れる、知っておくと、いろいろな命に触れることができます。このささくれ、秋頃、夏の終わり頃に枯れ枝にこのようなささくれがたくさんあります。これは実は蟬が卵を産んでいるのです。ここに母の思いと書いてありますが、枯れ枝に産みます。枯れ枝は硬いですが、でもきちんと卵を産みます。ここに白い米粒のようなものがあります。これが卵です。これが来年の7月になったら出てきます。そして土に潜ります。いろいろなものが周りがあるので、興味を持ってもらいたいと思います。これから冬になってくると保育園や幼稚園の窓際にバードテーブルを置いていると、いろいろな生きもの、鳥がやってきます。

小泉八雲という人を知っていますか。私のおじさんになるのです。と言っても最近はいけません。最近の小泉八雲を知らない人が多いです。この人はギリシャ人ですから、私の親戚でもなく、全く関係ありません。彼は江戸時代の終わり頃に日本に来るのですが、そこにエッセイ集があるのですが、「日本の心」の中の「虫の演奏家」というところにこのような文章があります。「かすかな虫の声からさえ繊細で美しい想像を生み出すことができる日本人は古代ギリシャ人と同じように今の西洋人に比べてはるかに優れたものを持っている。しかし、その価値に気づくのはずっと先になって、凄まじい工業化が進み効率で月並みで品のないものが本来の美しさを駆逐してしまった時だろう」と言っています。彼は100年以上前にこのようなことを言っています。だから今こそ、日本人はこのように繊細な心を持っているから、そこに振り返って、身近な生きものからいろいろなことを子どもたちに伝えていって欲しいと思います。どれだけ子どもが目を輝かせるかというのが課題だと思います。

長くなりました。ありがとうございました。

一色：どうもありがとうございました。命に触れ合って遊ぶということが、いかに子どもにとって大切かその具体的なお話をいろいろといただきました。今日はパネリストの小林先生がいらっしゃいませんので、私がパネリストになります。

小泉先生には、子どもに命の営みを感じさせるためにというタイトルで講演をしていただきました。それに関連して、それでは実際に「人は成長の過程でいつ頃死を認識するようになるのでしょうか」それから「子どもが命の尊さをいつ頃学ぶのでしょうか」その辺りについて、少しコメントをさせていただきます。

一つの例として、子どもが命の尊さをいつ学ぶか「むしむしQ」というNHK教育テレビ番組を紹介したいと思います。小泉先生もおっしゃっていましたが、幼稚園や保育所の若い先生方の中には、虫だと聞いただけで毛嫌いです。昆虫の写真を見たら嫌だという人が増えているということで、NHKの教育番組で生きものの特徴をアニメと実際の昆虫が登場し、クイズと歌で紹介する番組「むしむしQ」という番組が登場しました。これは弘前大学の城田先生が監修されたもので、私もアイデアをだしたりしました。バーチャルなことはあまりよくないと小泉先生はおっしゃいますが、バーチャルなことを通して、実際のことを学ぶということがあるのではないかと私は思っています。「むしむしQ」では、昆虫たち、生きものたちがウンチャやおしっこなど、実際の映像を積極的に見せる。フンコロガシは脊椎動物の糞(フン)に卵を産み、幼虫はそれを餌として育つ、カマキリのメスはオスを食べる、カマキリの幼虫はアリに食べられてしまう、タガメが小魚を捕まえて体液を吸うシーンもでてくる、というような実際の虫たちの様子を子どもたちに見てもらおう。皆、命があるのです。タガメの台詞ですと、「酷い奴だと思いでしょ、私たちが生きていくため、こうせざるを得ないのです」というような台詞を入れて、子どもたちに見せる。他の生きものを餌として、必要な分だけ虫は食べている。つまり、できるだけありのままの昆虫や生き物たちの姿を、子どもたちに伝えようとした。「きたない」「嫌らしい」と思っているのは人間で、虫や生き物から見たら、それらはちっとも「きたなく」なく、「嫌らしく」もないということです。人間の価値観に基づく、「善」も「悪」もないことを、伝えたかったのです。その中で、子どもたちもいろいろな生きものがいて、小さな命を大切にできない人間の問題というものも感じてくれるのではないかと考えたのがこの番組です。学生の皆さんもこの番組を小さい時に見たと聞きました。

それからもう一つ、金子みすゞの「大漁」。「朝やけ 小やけだ 大漁だ。大ばいわしの大漁だ。浜は祭りのようだけど、海の中では何万の、いわしの弔いするだろう。」金子みすゞさんは、すばらしい感覚です。自然と共と生き、小さな命を慈しむ思い、命なき者への優しい眼差しが金子みすゞの詩集の原点ということで、人間は他の生命を食べることで、自らの命を維持していかなければならないということ学んでいかなければいけない。このことと、命の尊さを学ぶことは矛盾しないのではないだろうかと思えます。そして、幼い就学前の子どもたちが、生きている世界というのは、アニミズム的な生命観です。つまり、生きているものと生きていないものがきちんと区別できていない状態だということです。そういう中で、山も月も太陽も皆自分と同じように生きていると思っている時期があるのです。幼児教育では、生きもの、命あるものが、どういふものかということ生きものと関わりを学んでいくということで、幼稚園や保育所では必ず小動物を飼ったり植物を育てたりをしています。今日、小泉先生がおっしゃったように、もっともっと身近に子どもたちが命を見つけて触って、その中から段々と命というものが尊いということを感じていくということが必要かと思いました。簡単ではありますが、パネリストとしてのコメントは以上です。

では、ここからは、皆さんとディスカッションをしたいと思えます。今日のお話を聞いていろいろなことを感じたと思えます。何ありますか。

**学生 A:** 貴重なお話をありがとうございました。私は先週まで幼稚園実習に行っていました。ス

ライドでは、本来子どもは虫が好きであると書いてありましたが、実習先で子ども達と一緒に虫探しをした際、虫を嫌がる子がとても多く、その中でも特に女の子が多かったように思います。このことはやはり、周りの大人などを見ているからなのかと考えたのですが、その辺りはいかがでしょうか。

**小泉：**虫の嫌いな子どもは、増えてはいます。男の子でも虫が嫌いな子どもが増えています。ただ、一番大事なのは、女の子は特に虫に触れる機会を9歳までして欲しいと思います。9歳を過ぎると女の子は虫を拒否します。私も時々、保育園の先生と話をした時に、私は小さい時に虫を触っていたという人がいます。でも大人になって触らなくなったと言っていました。逆に言うと、小さい時に触っておかないと、女の子は一生触らないかもしれない。とうことは、身近な命に触れる機会を失うかもしれないとうことなので、できるだけ小さい時に、虫を触って欲しいと思います。すべての虫に触れといっているわけではありません。先ほど見せた毛虫とか、気持ち悪いのあればそれはそれでいいのですが、だんごむしもいいし、ミミズでもいいのです。それを少しでも触っている機会を与えてあげた方がいいかと思います。

**学生 A：**ありがとうございます。

**一色：**他にいますか。

**学生 B：**貴重なお話をありがとうございました。私は、小さい時に一色先生が制作された「むしむしQ」を見ていたことを覚えています。その時は、虫が触れていたのですが、今はあまり好きではありません。それでもこの前の幼稚園実習では子どもがゴオロギを見つけて、「先生、捕って」と言ったので、先生が怖がってはいけなそうと思い、虫を捕まえました。今日のお話を聞いて、先生は子ども達が小さい時に虫に触れる機会を持つことができるようにしなければいけないと思いました。

**小泉：**虫を嫌いな人が虫を触るということは勇気がいります。そこはやはりプロとして乗り越えなければいけない部分があるかと思いますが、しかし、怖がることも大事だと思います。すべて先生が虫に触れるようというのではなくて、何人かは虫が嫌いという人もきちんと子どもに伝えることはとても大事だと思います。

虫が嫌いという人手を挙げてください。見るのも嫌いという人。その学生さんは、大事な存在です。というのは、私も学生を山に連れて行った時に、虫を嫌いな学生が急に止まって「何かがいる」と叫ぶのです。何も見えません。よくみるとクモがいました。その学生は虫が苦手なので何かいるかもしれないという目で見ているのです。私たちは、ここにいるなと思いつつ歩いているのですが、その学生はあらゆるところにアンテナを張り巡らせて目を見開いて探しているのです。だから、その学生の方が虫

を探す確率は高いのです。子どもより早く発見をするかもしれない。そういう先生は子どもにとって重宝されると思います。ですから、今、手を挙げた人は喜んでください。子どもたちには絶対に喜ばれます。

**一色**：小さい頃に虫を触ったり、林に行って見たという人はどれぐらいいますか。手を挙げてください。小さいころはたくさんいます。それが段々と大きくなってくると嫌いになってしまうのですね。その辺りはどうなのでしょう。

**小泉**：先ほど、ゴキブリの話をしました。ゴキブリを家で見ると、やはり気持ちが悪いですが、山で見ると違います。家で見るゴキブリと山で見ると何が違うのか違います。だから、自然の中で見る生き物は決して気持ちは悪くないのです。ただ、自分の生活しているエリア、そこには入ってほしくないと思っている時に入ってくる虫は気持ちが悪いのです。だから自分のエリアをもう少し自然の方に向けると、生きものを怖がらないかと思います。私のエリアに入ってくる虫は怖いから、そこに入ってくるものは気持ちが悪いというように考えているという気はします。

**一色**：エリア以外のところに行けば、そんなに嫌がらないで、いろいろな生命、植物でも、鳥でも虫でもいろいろな生きものをじっくり見たり触ったりできるのではないかというお話でした。学生の皆さんも小さい頃はそういう経験を持っていますから、またその子ども心の気持ちをもう一度幼稚園教諭、保育士、小学校、子どもを教育する立場にいる人ですから、もう一度、その子どもの心を振り返ってみて、命の大切さを子どもたちに伝えて欲しいと思います。では、ここで第一部を終了いたします。

## 【休憩】

**一色**：それでは第二部を始めます。ここからは一般の方と今日のテーマについてディスカッションしていきたいと思います。

**一般 A**：本日はありがとうございました。先ほど、学生さんが小さい頃は虫が触れたけれども、大きくなって触れなくなったという話に関連するのかわかりませんが、今、娘が沖縄県立芸術大学に通っているのですが、その娘からつい先日聞いた話ですが、非常に虫や草が大好きな子どもなのですが、沖縄というところは、皆さんはリゾートで行かれるので、よくおわかりにならないと思いますが、虫は平気で部屋の中に入ってくるのです。ヤモリやイモリは当たり前で、見たこともないような虫がぞろぞろといっぱい入ってくる場所なので、私は怖くてすぐに掃除機で吸おうと思うのですが、娘は掴んでポイなのです。その時に教えてくれたのは、小さい頃虫や草が好きで、ずっと遊んでいた。しかし小学校3年生の頃に男の子たちはそれで遊んでいるけ

れども、私がそこに入って遊ぶと女の子なのにどうしてそこに入って遊ぶのと注意をされ、そこから仲間外れが始まってしまい、それに耐えることもできないし、仲間に入っていきこともできなかったから、虫が遊びの一環ではなくなり、興味はあるけれども女の子は触ってはいけないというイメージを持ったという話を聞きました。よく幼稚園や、小学校の先生にもこの前聞いたのですが、やはり虫に触れるか聞くことがあるとおっしゃっていたのですが、必要とされながら小学校にいくと、虫を触るといことが仲間外れになるというのも大きな原因の一つではないかと思うことができました。

女の子が女の子の遊びではないとそこで閉鎖的になるということ、遊びが、もう少し学問ではないですが、探求心に繋がるというには欠けていくのではないかと。自然が嫌いなのではなく、子どもは自然が大好きだと思うのですが、大人の方でそのように色づけをしてしまう時期がくるために、自然を嫌っているわけではないけれども、のめり込めないところがあるのではないかと思います。

**一般 B：**大阪から参りました。大阪の狭いところに住んでおりますので、退職してから家の前にプランタを置いて、秋にはチューリップの球根を植え、春、チューリップが終わったらイソトマを植えて育てていたのですが、そのイソトマが毒を持っているということで、新聞で見たのですが、小学校の校庭にイソトマを植えていたら、毒があるからいけないと騒がれたことがあるので、イソトマにどんな毒があるのを伺いたいです。

**小泉：**私は植物学者ではないので、その辺りはよくわかりませんが、イソトマは青い花ですね。それがおっしゃったように騒がれていたことも知っています。私も保育園で植えていたこともありますが、毒があるものも含めて、植物は植えた方がいいと思います。植物は基本的に毒があります。それがどこまでの毒かということがありますが、ヨウシュヤマゴボウというのも今、実がぶら下がっていますが、それも実は食べたら毒ですが、染料として遊べることができたりしますし、キョウチクトウも葉も幹もすべて毒ですが、花自体はきれいですし、夏場、蝶はここにきます。ですから毒だからといってすべて排除するのはどうかと思います。ただ、その毒性については、ある程度知っておかないと食べてしまったりすると大変なことになります。でも毒があるからといってすべて排除することは問題があるかと思います。

**一般 C：**この大学のふれあいの維持管理、林草整理をさせてもらっている NPO の者です。今日、お話を伺っていて、小さい頃は抵抗なく虫を触っていたとか虫を飼っていた。9 歳以上になると、小学校に入学すると虫が触れなくなるという、成長なのかどうなのかわかりませんが、そういう変化がみれたということでした。私の場合、振り返ってみると、このような活動もしておりますから、本当は虫に対してずっと抵抗はなかったのですが、今までにムカデに刺されたり、蜂にさされたりということがあって、しかも車で帰りがけに背中が痛くなった。どうしたかと思ったらアリが入っていたりなど、それ以来段々と虫が嫌いになりまして、今は特にムカデを見ると、足

で踏んで殺したり、アリを見てもトラウマになっています。そういうことがあって虫が嫌い、触るのは抵抗がないですが、嫌だという拒否反応を起こしてしまいます。そういう体験もなく、理由もなく虫が嫌いになるというのは、私たち戦後生まれの人間は、他に珍しいものもないし虫で遊んだり捕まえたりしていました。今、見ていてそういうことが話題になっているということは、お父さん、お母さんに関係があるのか、テレビなどが関係するのか。先ほどのゴキブリの話ですが、ゴキブリキラーとかホイホイなど、虫に対しての防御などの宣伝、メディアの風潮が高いのではないかと思います。一緒に活動をしている人でも、イベントの時に、お孫さんを連れてきてはどうですかと言った人もいるのですが、その人は、私の孫は虫が嫌いだからと仰られ、それ以上話が進まなくて困ったこともありました。今お話を聞いていて、そのようなことを考えました。

一色：ありがとうございます。コメント、または質問、いかがでしょうか。

一般 D：今、おっしゃったように私もこの大学の裏山のアベマキの雑木林、大学では「ふれあいの森」と読んでいるようですが、そこで里山管理をさせていただいています。今日は、活動とつながりの深いお話を伺いまして、たくさんヒント、勉強をさせていただきました。意見として3点ほどございます。一つは、今日の写真の中で、特に関心を持ったのが、小さな黄色の花、レンギョウのトンネルの中を子どもたちが歩いていて、大人であれば小さなレンギョウの垣根なのですが、森という言葉が使われていた。これは、非常に大切な見方ではないかと思います。やはり子どもに触れ合う場合に、私たちはどうしても大人が目線、感覚でものを見るのですが、子どもには子どものヒューマンスケールがある。大人には大人のヒューマンスケールがある。それを一緒にしますとお互いに理解ができないということになるのではないかと思います。

それからしばしば虫嫌いということで、ある年齢になると女の子、男の子で虫嫌いがあるというお話でしたが、これはヒューマンスケールに対して空間ではなくて、時間の問題、ヒューマンタイミングとでも言いましょうか。やはり人間はそれぞれの発達段階があります。常識的には受精卵から大人まで一連の系統発生は、個体発生は系統発想を繰り返す。一連の成長ですが、ただ、外とのつながり、環境との関係では、繋がっているのではなくて、それぞれの時期、極端にいうと、胎児は胎児の時期、乳幼児は乳幼児の時期、そして、幼児は幼児の時期、それぞれのひとつの文化、その時になければならない環境との関わりを我々は持って生まれてきているのではないか。もちろん、青年になれば青年の一つの文化があり、壮年になれば壮年の文化があると思うのですが、そのような視点から見た場合、やはり一概に乳幼児、幼児、小学校の子ども、低学年、高学年、ひっくり返って虫が好き、嫌いと言えないと思います。その時期によって、或いは男の子の子で、人間の成長の区切りでよく研究をすればもう少しいろいろな点が見つけられるのではないかと思います。

三点目ですが、最後の方で一色先生がおっしゃった、いつの時期に、所謂、死について感じたのだろうかということでしたが、どうも生きものの勉強会ですと、私たち生きているということを全く大前提

にして話を進めていくわけですが、やはり、生きていくということは、いつかは死ぬ。今、共生の世の中といわれていますが、言葉を返せばそれは共死、共に死ぬ世の中、そういう視点から生きていく生きものを見ていく。或いは、生き方を考えていくということも大切な視点ではないかと思えます。そういう点では今日のいろいろな事例、お話の中で実にたくさんのヒントがあったのでとてもいい勉強になりました。

**一色：**貴重な三点のお話ありがとうございました。小泉先生、何かございますか。

**小泉：**三点目の死についてですが、保育園や幼稚園、小学校も含めて、虫捕りに行くと、その帰りは必ず虫を逃がしましようということがあって、それはなぜそうするかというと、学校の先生などは、虫には両親がいて、それは皆も家から離れて一人で暮らすは嫌でしょうというようなことを言って、子どもに虫を逃がさそうとするのです。私は逆で、生きものを捕まえたら、最後まで飼うということをしなくて、今、死というものがとても遠くなってしまって、病院で死ぬということが多く、目の前で人が亡くなるということに向き合うことがない中で、やはり、すべての生きものをすべて死ぬのであって、それをできる限り身近な生きものからそのようなことを感じることができるということの空間を残してあげるということも大事ですし、昔、「森の学校」という映画の中でも、生きものの死についてありましたが、河合隼雄さんのお話でしたが、身近な命から生きものの命を知る機会があるから大事なことだと思うので、できるだけそういう空間を残し、そういう空間に子どもを連れて行って、できるだけ生きものに触れ合うというのが大事な時代になっているのかという気がしています。

**一般 E：**今日はどうもありがとうございました。吹田にある幼稚園で勤務しております。先ほどお話の中で子どもにとっての害虫はないということでしたが、少し自然や環境の面で保育に携わっている中でいつもなら蛾の幼虫、芋虫が出てきた時には幼稚園では故殺していましたが、ただ、今年は、殺さずにおいておく。蛾であることは解っていたのですが、できればアゲハとかがいいと思いつつ、子どもたちにとっては蛾の幼虫が何かなのはわかっていないので一生懸命飼っているのですが、10匹見つけたら次の日1匹もいなくなって砂の中に埋めていたりとか、棒を立てていたりとかいろいろなお遊びが展開されていて、残酷なものも経験、体験の一つかと楽しんでいたのですが、ただ、本当に危ない毛虫も何種類かいると思うのですが、そういう場合は、どのように共存、というか、体験を考えるのであれば、そのまま置いておいて「触らないで」と言葉だけの教育がいいのかとも思ったりするのですが、ある程度やはり駆除も考えないといけないのかというところで小泉先生のお考えをお聞かせいただきたいのが一点と、造園業を営まれているということで、木々のお話ありがとうございました。私は、花が好きで、ガーデニングから派生して、幼稚園、保育園でも花を植えてそこから環境教育、花を取って遊ぶとか、種がどこにあるか種取遊びとか、種にどこにあるのかを葉を見ながら花の芽を摘んで、同じ葉のものを探しましようという探検遊

びなど、そのような展開をして遊んでいるのですが、花に着眼した遊び、今までのご経験の中でエピソードがあればお聞かせいただきたいと思います。

**小泉：**毛虫の話ですが、危ない毛虫というのは、基本的にはチャドクガが危ないです。チャドクガは基本的に食草がチャ科・ツバキ科ですから、それらを植えない限りは来ません。私は保育園に椿、サザンカ系は基本的には植えないようにしています。ただ、ツバキ、サザンカも鳥が来ますから、その辺りを観察しようというのであれば、植えるべきだと思います。ただ、その時に、保育園、幼稚園の先生がこの葉にはチャドクガが来るというのをやはり覚えておかないと、知らなかったでは話になりませんから、時期的にも早ければ3月、大体4から5月、秋口ですからその時期を注意しておけばいいし、集団でつきますから、それは発見しやすい部分があります。危ない毛虫はそれぐらいです。他にはイラガこれはバラ科によく来ますし、柿の葉にもきますが、イラガについては、触らない限りは大丈夫です。チャドクガは脱皮殻が一番危ない。脱皮殻が葉の裏についていて、風に飛んで、それが皮膚などにつくと炎症を起こします。チャドクガは近寄らない、イラガは触らないというのが基本です。イラガも基本的には葉にいますし、秋になってから幹に降りてきますので、その時に注意すればいいです。イラガの場合は、刺されたら痛く痒いですが、すぐに応急処置をすればそんなに腫れ上がることもないので、基本的には問題がないと思います。ただ、保育園、幼稚園によって、地域に方に毛虫がついているといわれて、それで葉を撒くこともあります。私は基本的に見に行つて、これはこうだから、今回は撒きましょうということもありますが、基本的にはまず、撒かないようにします。

花の話ですが、基本的に花は誰のために咲いているかということなのです。花は人のために咲いているのではない私は思っています。虫が来て種を運んでもらうために咲いているということですから、花については、虫がくるような花を植えるようにしています。だから見栄えのするような花、外来種ではなくて、季節を感じるような秋の七草のようなものを植えると、秋になると秋の花にはたくさんの蝶が来ますし、吸蜜植物でもありますし、食草にもなりますから、そのようなものを植えるようにしています。

**一般 F：**出版社の者です。今日は興味深いお話をありがとうございました。先生のお話の中で9歳までは感性を伸ばすことが大切だ、庭の自然と触れさせるのがいいというお話でしたが、これはスタートは何歳ぐらいからという適切な年齢はあるのでしょうか。それとレンギョウのトンネルを個人の庭に造ろうと思ったら、何か簡単にできる方法があればお聞かせ願いたいのです。あと一点、宮崎駿先生の挿絵の本の名前を教えてくださいませんか。

**小泉：**本の名前は「虫眼アニ眼」です。小学館から出ています。随分前に出た本です。

スタートの話ですが、1歳半ぐらい、よちよち歩きぐらいから関わられるかと思っています。その辺りから関わっている方が、自分たちの周りには、意識として入るまでにそういう触れるもの、基本的には、ダンゴムシ程度から始めればよいと思うのですが、そこから4、5歳ぐらいが男の子などは興味を持

ちますので、そこからどんどん発展したりしていきます。4、5歳ぐらいになってくると、先ほどの命のつながりの部分も見えてきますから、この前もマイマイマカブリを捕まえるのにあたって、かたつむりを探しているという命のつながりを自分で発見して、餌を自分で集めているということも出てきますので、そうなるくと結構子ども自身も命の営みも解ってきて面白いと思います。

レンギョウのトンネルですが、実は、この本に造り方が載っています。これは保育園でこのように造りますというのを載せています。これはハウツー本にもなっていますので、これを読んで何箇所かの保育園で造っているところもありますので、作れるかと思います。

先ほどの本の話ですが、他には「虫捕る子どもだけが生き残る」という本もあります。これは、養老猛司、池田清彦、奥本大三郎の3人の虫の重鎮のお話で、これはとても面白いです。

**一般 G：**神戸市北区道場町で NPO 散歩クラブという子どもの主に2、3歳児の親子、年少さんなどを預かって、週1度、子どもの自然体験をしています。いつも案内を送っていただいております。ありがとうございました。今日はとても楽しみにしておりました。

私の子どもも中学3年になってこの前、教室に蜂が飛んできたので、怖いふりをしたと言うのです。実際は、父親が昆虫の専門家で、小さい時に昆虫標本を作ったりしていたので、とても虫が好きで、怖くないのですが、怖がらなかつたら皆に愛に思われるような気がするから無難に装っていると言っていたので、やはりそういうものなのかと思いました。やはり、目立ちたくないという日本の文化があるのではと思ったり、虫が好きな女の子というのは、少し普通とは違うと思われるかと思いました。実は昨日、一昨日とイナゴを捕って食べるという体験をしたのですが、小さい子どもは先入観がなく、虫は身近な生きものでお友だち的な存在だと思っています。保育園とか幼稚園は、小さい子どもが本当に毎日身近に遊ぶ園庭で、身近な自然と遊ぶのが子どもそのものだとおっしゃったのですが、そのようなところで関わる大人が、どのように子どもたちと言葉をかけたりするのがとても大事になってくると思いますし、やはり、自然や教育は答えがないですし、聞き取り方も一人ずつ違い、答えもない、子どものありのままを受け止めるためには、自然は、本当にどんな子どもでも受け入れてくれるので、居室であれば、こうなさいとなりますが、自然の中では、小泉先生のような方が将来保育士を目指している方に自然というものは、とても子どもたちにとってどういうものなのかという今日のような講義がもっと頻繁にあれば子どもにとって昆虫とはどんな存在なのか知る機会になると思いますし、実習などあれば、学生さんが幼稚園の現場に立った時に、具体的にどうすればいいのかも経験できるかと思いました。今日は、改めて自分がやっていることとつなげて勉強できましたし、活かしていきたいと思いました。

**一般 H：**地域で子どもに関わっています。子ども園の横に里山を作っています。子育て広場と位置づけて里山作りをしています。今、特に携帯電話、スマートフォンの関係のデータということで、子どもが自然と離れていっているという話をします。先日もそのような話の講演会があったのですが、やはりアナログとデジタルの違いということで、人と実際に触れ合っていくということが

子どもにとって感性を磨いていくことに大事な事だと思っています。特に今、広島でLINEによる事故が起こったりと、知らない人とすぐに繋がっていく中で、相手を知らなくても友達になっていく情報化の時代です。その中で本当に自然の中でじっくり考えて感性を磨いていくということが、地域を自分の補にすることから合わせて大事なことだと思います。今、特に人をけちらして競争世界になっていますが、お互いが助け合う共生社会ということで、そのようなことを含めて自然の中で子どもが遊んだり、水の中で魚の観察などをするのですが、そういう点を小さい時から地域の人と一緒にやっていくことが大事だと思っています。特に今、子どもがどう将来を考えていくかということで、特にスマートフォンの関係のLINEなどで熱中している中学生もいると校長先生に聞きましたが、そういう点と違って、本当に自然の中で自分の感性を磨いていくということが特に地域で大人も一緒にやっていけないと思います。

**一色：**どうもありがとうございました。今日は、皆さん方からのコメント一つひとつとても沁みるようなお話を伺いました。いつもならまとめとなるのですが、皆さん方のいろいろな話、小泉先生のお話を伺って、その中で小泉先生が、言葉として、命と遊ぶということもおっしゃっていました。そういうところで皆さん方がコメントしていただいたものすべてでできりたいと思います。どうもありがとうございました。